



TITLE:

福州の發達

AUTHOR(S):

米倉, 二郎

CITATION:

米倉, 二郎. 福州の發達. 地球 1936, 26(6): 411-425

ISSUE DATE:

1936-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184634>

RIGHT:

此等の事實は古き種が消滅して新らしきもの、現れたる時を示して居り（長尾巧、九州古第三紀層の層序十六、地學雜誌第三十九年五九四頁參照）海性E、F、G各層は蘆屋層群下部の杵屋層に相當して居ると考へられる。尙下位の芳谷累層に相當するものが現れるとすれば附近の地質より想像するに、特殊な事情の存せざる限り淡水性乃至半淡水鹹水性の介化石を産し稀に鹹水性の介を含む事あるべく又蓮其の他の植物化石を産出するかも知れない。

以上の化石は筆者が直接露頭より全部採取せしものでは無いが、砥川鑛業所新井學士の採集品及當時斜坑掘進の爲め掘り出された捨石より新井學士の御指圖を受けつゝ層準に注意して集めたものである。然し化石採集上尙多少遺憾の點が無きにしてもあらずで未だ満足すべき調査も研究も完成して居ないが此は新化石產地紹介の意味で發表する次第である。（終）

福州の發達

（圖版第七版付）

米 倉 二 郎

小 序

福州は我が臺灣の對岸福建省の首都である。基隆より僅か百五十哩、一夜にして到着できる近距

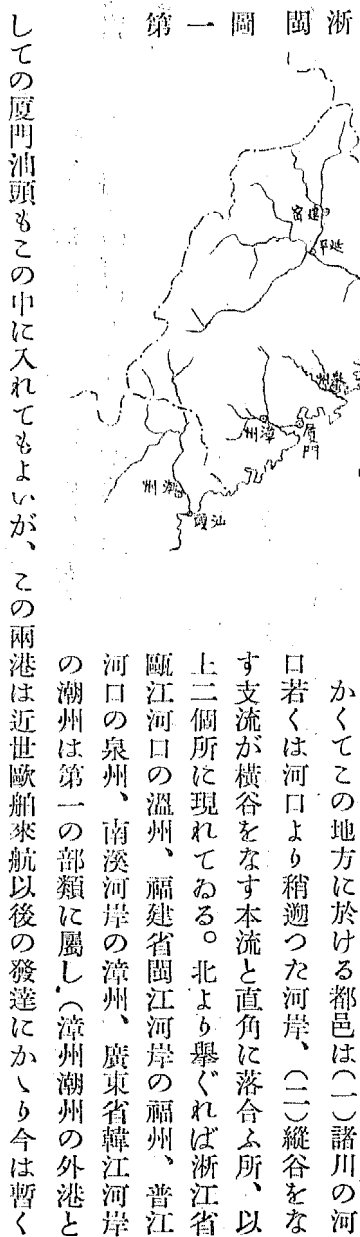
離にあるがこれまで内地からの旅行者で福州を訪れた人は甚だ稀の様である。私は今夏琉球を経て臺灣に至りそれより上海に向ふ途中福州に立寄る事ができたので、その際見聞せる事を基礎とし、二三の史料によつて本稿を草した。福州に關しては宋の淳熙九年（西紀一一八二年）清源梁の撰にかゝる三山志なる稀觀書があるが幸にも京大東洋史研究室にその寫本一部八冊を傳へてゐるので、明代の閩都記、清代の福州府志、福建通志等と參照すれば、福州市域の發達が略明かとなる。之は古き起源を有する一般支那都市の發展過程の一類型と目すべきものであらう。

福州の現状も決して興味がない理ではない。福州によつて統治さるゝ福建省が我が臺灣の國防上重要な意義を有する事は申す迄もなく、されば我國は清と交渉して、福建省の他國への不割讓を聲明せしめたのである。然るに米國は福建北部の三都澳に海軍根據地を得んと策動し我が反對にあつて實現されなかつた事がある。民國政府も清と同様の處置をとる事を言明したのであるが、最近新聞紙の報ずる處によれば南京政府は福建省を通る中國航空公司の英米二航空路との連絡を承認した由である。

我國と福建省との文化的聯關は更に深いものがある。臺灣本島人の大部分は福建南部の漳泉地方よりの移民であり、風俗習慣全く同様である。又福州は明清時代に於ける琉球貢使の上陸港であつた。明代に猖獗を極めた倭寇は、この近海を荒し福州府城に迫つた事もある。しかし之等の問題は別の機會に譲り、今は專、支那に於ける地方都市發達の一例として福州を取扱ひその現状を簡單に述ぶるに留めやう。

Abstract

れも横谷をなして東流し臺灣海峽に注ぎ、海岸より内陸への通路を開き、その支流は縦谷をなして南流又北流してゐる。山岳重疊せる爲陸路は峻險であり、爲に物資の出入は古來水路によつてなされて來た。



しての厦門汕頭もこの中に入れてもよいが、この兩港は近世歐舶來航以後の發達にかゝり今は暫く

論外とす) 甌江中流の處州、閩江中流の延平、建寧等は第二の例である。そして後者は前者に従屬する地位にあり、河口附近の都市がその流域を支配してゐる。その大きさは略流域の廣狹に比例し諸川中最大の閩江の河口に近き福州が他を壓して福建省都となつてゐるのは地理の然らしむる所であらう。

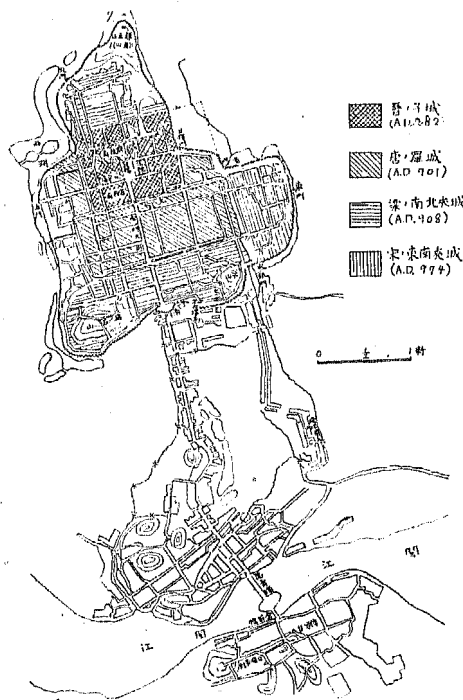
福建地方は支那最古の地理書禹貢では揚州の域であり、周代には七閩の地、秦代には閩中郡と稱せられた所である。閩は蠻と同義語で當時南支一帯に分布した苗族が彼等自身 *mon* 又 *mum* (人の意義) 等と云ふ音を傳へたものらしく、民族の名前がやがてその住地に流用されたものと考へられる。この閩地は山岳重疊せる爲その開發は嶺南地方よりも遅れ、秦漢時代迄は化外の地として残つてゐた⁽³⁾らしく、現在に於ても先住蠻族の遺民が山間僻地に原始的生活を營んでゐる。畚民と呼ばれるのが之である。

漢代には無諸なるものが閩越王となり、閩中の故地治に都したと云ふ。治とは福州の北隅越王山(屏山)の南麓にあり、古、冶鑄の地であつたから、その名を得たものと云ふ⁽⁴⁾。惟ふに當時に於ける福州デルタの發達は尙貧弱であり、閩江の流水は屏山麓に迫つて居り、治は河川交通の要衝に當り又閩江流域には銅鐵鑛の發見さるゝ處も多いから、それが此の地で冶鑄されてゐたものであらう。

閩越地方の漢族による開發は三國時代吳が江南によつて國をなした頃に始まり、吳は建安郡を此の地に置いたが晉の太康三年(西紀二八二年、以下括弧内は西紀に従ふ)に至つて更に晉安郡を置き、郡守嚴高は冶の故城は城狹く衆を聚むるに足らずとして、その南に子城を築いた。支那都市發

達史上、所謂子城とは官衙區を土壘その他のもので區劃せるものを意味し、都城の中央南寄に設くるのが普通である。⁽⁶⁾ 最高は只、子城のみを設け民庶はその四周に聚落するにまかせ、別に都城は築かなかつた様である。この子城は唐の中和年間（八八〇年代）に觀察使鄭鑑修によつてその東南隅を擴張され、下つて宋の熙寧二年（一〇六九年）太守程師孟が更に西南隅を改修したが、その廣表は南は虎節路（子城の虎節門よりその名を得最近まで城濠の遺跡ありしも今は埋立てた）を限り、

第二圖 福州市域發達圖



東は麗文坊、北は恐らく雲歩山を含む東西線、西は舊水關より西湖に通ずる城濠に界される東西二里（支那里その一里は我が約四町）南北又二里強の方形のプランで晉都洛陽の東西七里南北九里の比例に近いものであつたらう。

隋代には此の地方を閩州としたが唐の開元一三年（七二五年）改めて福州とし都督府を置いた。福州とは州の西北の福山（今名董峯）によつ

て命名された（元和郡縣志）もので福州の名之に始まる。⁽⁷⁾

唐の天復元年（九〇一年）閩王審知創めて羅城を築いた。その東南隅にあつた通津門は最近まで遺存したので羅城の南邊は、福州城内を東西に貫流するクリークではとりもなほさず羅城周隍の遺存せるものである事を知る。東邊は海晏門が現在の澳橋の西にあつたと傳へらるゝから、此の下を南北流して羅城の南濠と直交するクリークが亦その遺構であらうと思はれる。西邊も同様に南濠が直角に北流する一線を西湖に向つて引いたものであつたらう。たゞ北邊が稍不明なるも子城の北邊と一致したか、それでなくとも甚しく之に接近したものであつた様である。即ち審知の築いた羅城は子城の東南西の三方に擴がつたもので、子城を中央北寄に圍んだ方四里位のものである。三山志には四十里と見えてゐるが十四里の誤寫でなければ單位とされた里が特別の短いものであつたらうか疑はしい。羅城が概して南方に擴まつたのは福州デルタが漸次發達して、この方面に聚落する民家の多かつたによるであらう。

五代の梁の開平二年（九〇八年）に審知は羅城の南北に更に夾城を築いた。南夾城は羅城の南邊を底とし、今日の南門（當時の寧越門）を中央として、西は烏石山、東は于山に至る半圓弧をなし略今日の福州城の南邊に當り、北夾城は子城又は羅城の北邊の上に立ち越王山を含む圓弧で之も亦略今日の城北部に當り、共に半月狀をなす處より南月城北月城とも稱された。（黃滔の萬歲寺詩に新城似月圓とある）唐末五代の間には支那都市の城門外に所謂草市なる繁華の地區が簇生しつゝ、あつたが福州に於ける南北夾城の増設も又この爲であつたらう。

宋の開寶七年（九七四年）に至つて、刺史錢昱は更に東夾城南夾城を築いた。東夾城は現在の東

門（當時の行春門）を中心とし羅城の東邊を底とする圓弧狀をなし、南夾城は現在の南門より更に南にあつた合沙門を中心とし審知の南夾城の更に南方一帯を含み外城とも稱された（外城は東南夾城に共通にも使用された）此處に至つて、現在の福州市域は殆んど出現してしまつた。

二

これより先、自立してゐた錢氏は外城を築いて五年にして（宋太平興國三年九七八年）降り、太宗は詔してその城を墮せしめた。この時の破壊は福州の發展に甚大なる打撃を加へたものであつた。皇祐四年（一〇五二年）知州事曹穎叔が漸を追つて開修しかゝつたのであるが、その工程は遅々と進まず、嘉祐元年（一〇五六年）守臣蔡襄が修築を請ふた奏文によれば、太平興國中に城池を墮毀して以來、福州四圍の城牆は高さ僅かに三―五尺で牛や羊を遮閉するに止まり、小兒と雖も皆越へる事ができる。さて福州の外城は周圍約二十里もあつて、之が改修には莫大の工費が必要である云々とある。

その後熙寧元年になつて、郡守章岷は子城だけでも修築したいと奏し程子孟が遂にその工を了した事は前述した所である。その後數回城池を修めたけれども宋末の世州城は遂に舊規に復する事能はずであつた。

景炎二年（一二七七年）元の大將董文炳軍を率ゐて福州を攻略し、これより福州城は又々廢墮された。元末、至正二四年（一三六四年）に陳友定が稍修理したが福州城が完全に復興されたのは明となつてからである。

明の洪武四年（一三七一年）王恭は北は越王山に跨つて樓を起して様樓（一名鎮海樓）となし、南は烏石、九仙（干）山を繞る古の外城の線を復興し石を以て城壁を築く事三三四九丈（一八〇丈一里として約一九里）その上に多くの敵樓警鋪等を設けた。かくて宋初の福州城の廣袤は四百年後に至つて漸く再現された。

成化一九年（一四八三年）大風雨によつて樓櫓が殆んど摧毁されたが之を修理し、嘉靖三八年（一五五九年）には當時暴威を逞しうしつゝあつた倭寇に備へんが爲愈々堀を深くし牆を高くした。清朝になつて數回城樓を補修したが城の廣袤は明代のそれより變化しなかつた。その代り城外の發達は更に繁榮を加へて行つた事と思はれる。

福州城南北の中央幹線たる南門大街を眞直南に下る道は城内より閩江岸に出づる最捷路である。こゝに閩江は廣大なる中島の爲に二流となつてゐるが、福建南部泉州漳地方に亘る重要路線が古來この中島を通つて南下してゐたらしく、既に宋の元祐年間（一〇九〇年）頃から此處に舟橋が架せられ當代人は浮橋と呼んでゐたが、元の大德七年（一三〇三年）に至り石橋に改めた。之は明代の修築を経て最近又邦人技師の設計により擴張された福州名物の萬壽橋である。この地一帯は宋以來南臺と呼ばれ現在では福州城内を凌ぐ繁華の巷である。清の乾隆一三年福建巡撫の任にあつた潘思棠は南臺に就いて左の如く記してゐる

出福州城而南其市曰南臺。有橋跨大江之上。曰萬壽橋。度萬壽橋而南有橋相接。曰江南橋。（中略）南臺爲福之賈區。魚鹽百貨之湊。萬室若櫛。人烟浩穰。赤馬餘皇估艫商舶魚蟹之艇

交維于其下。而別部司馬之治權更之靡舌人象胥蕃客之館在焉。(下略)

これによれば清初に於ける南臺の繁昌は殆んど今日と選ばない状態であつた事がわかる。宋代既に此地に新市が現はれたと傳へらるゝから、その繁榮は早くから見られたであらうが蕃客其他貿易關係諸官廳官人の居住は明代よりは遡らないものと思ふ。宋元代に福建に來航したアラビヤ人を始め多くの南蠻人は専ら泉州に來てゐた。そこでは所謂蕃坊と稱する居留地が發生したのであつたが、明代となつて泉州在留外人に壓迫を加へ、次いで福建市舶提舉司を福州に移す事となつた。外人の來福は之に始まると思ふが琉球人の他にどれだけの南蠻が來たかは不明である。福州に多數の外國人が居住する事となつたのは阿片戰役の結果たる南京條約に於て福州が他の四港と共に開港された道光二二年(一八四二年)以來の事である。南臺の中島である倉前山に租界が設けられ、在留外人は邦人を始め皆此地に居住してゐる。斯くの如き南臺の發達と共に城内に至る道路の兩側にも商賈軒を連ねて城内と南台とは一つの市域を形勢する事となつた。

閩江と城内を連絡する水路は城の東南水部門に至るクリークで、この沿岸にも早くから繁昌の地區が現れた事であらう。福建市舶提舉司に屬する進貢廠柔遠驛は、この水部門外河口の地に設けられ、琉球人は隔年此處に入貢し、隨員の大部分は入京使節の歸來する迄此地に滞在したのであつた。

福州城の西門を出で、西すれば、洪山橋によつて閩江を渡り、上流地方に通ずる主要陸路があるそれで西門外にも亦市區が擴がつた。

民國となつてからは各方面に再建設が行はれてゐるが、最近に於ける道路計畫、都市計畫の發展

は旅行者の等く注目する處である。⁽¹²⁾福州も御多分に洩れず明代の遺構を留むる城壁を殆んど撤去してその跡を利用して環城路なる街道となし、又南臺より城内鼓樓に至る目貫の通を始めとして主要幹線路は從來の石疊道をアスファルトに改裝し、又城外地區に新道を開いて將來の市域發展に備ふる等面目を一新しつゝある。

以上福州の發展を概觀した處を要約すれば、福州の發生は遠く漢代に遡るが城市として明確に現れたのは晉に至つてからで唐宋の間に相次いで市域を擴大した。その過程は當時の城濠や建造物の遺存するものによつて之を推定する事ができる。宋末元代に一旦衰へたが明に至つて復興され、それは清代を経て現代に受繼がれて來た。唐代迄の府城は整然たる方形のプランであつたが、その後門外に於ける聚落の發達に従つて外城が不規則なる形態を持つに至つた事は注目せらるべきで支那古來の都市はその核心部に發生初期の方形區域を遺存せるものが多い様である。支那都市を城廓の形態によつて分類せんとする試みは各都市に就いてその市域發展を歴史地理的に分析した後に於て初めて意味を持つに至るであらう。(故佐々木彦一郎氏は支那都市の城廓による分類が困難である事を地理學評論十卷都市の構造形態の一分類中に述べてゐられる)福州の斯くの如き發展過程は、盡く福州に特殊なもののみではなく否寧、その多くは一般支那都市の持つ過去と相共通せるものと思ふ。

西山榮久氏⁽¹³⁾は支那都市を發生的に城と鎮とに二分されたが福州は勿論城に屬する。又西田與四郎氏、王益厓氏⁽¹⁴⁾は支那都市の形態を三分して華式都市(支那固有都市)歐式都市、華歐型都市とされ

たが福州は南臺を有する事により華歐型都市の一類型と云ふべきである。

三

福州市域の發達は略明かとなつたから次には、その現状を都市地理的に考察すべきであるが、關係資料を十分蒐集し得なかつたので、此處では瞥見の印象を主とし、福州便覽(註)の記事を信賴する事としてその大要を述べやう。

八月二十九日基隆を午後二時出帆した長沙丸は夜半閩江河口に達し、此處に假泊して上げ潮を待つた。この近海は潮汐干満の差大きく、閩江河口に於ては大潮時は二〇呎(註)にのぼるのである。早曉潮に乗じて遡航する事二六哩にして福州の外港たる馬尾に至る。この間、河水は支那の川としては比較的清澄で、四圍の風光あたかも我が瀬戸内海を航行してゐるかと思ふごうばかりである。溺れ谷で川幅が廣く、花崗岩の山地が河岸に迫つてをり水道や海峽の如き錯覺を呼ぶ。しかしこの幻想は江中に浮ぶ繪の如き羅星塔、河岸に林立する戎克のマストを望んで一瞬にして現實にかへる。馬尾の錨地はこの塔に因んでバゴダ・アンカレージ(註) (Pagoda anchorage) と呼ばれ、二、三千噸級の沿海航路の商船は此處に泊す、潮を選べば一萬噸位の船までは遡航できるとの事である。此地は福州の外港として海關等の設けもあつて繁榮してゐるが近代支那海軍發祥の地として記憶さるべきであらう。舊式乍ら造船所もあり、ニウ・ブリューに塗られた玩具の様な支那の砲艦が二隻碇泊してゐた。羅星塔は遠く宋代の創建にかゝり、古來閩江遡航の好標識であつたらしく近世の支那地圖は皆之を記入してゐる。風の如く襲來した倭寇も幾度か之を目指して來たであらう。近くは清佛戰爭

に佛提督クルペーは清の全艦隊十一隻をこの塔下に撃沈した。江上に演ぜられた數々の悲劇を秘めて千年の古塔は黙して語らず、福州を訪れた者に忘れ難い印象を残す。

馬尾で小蒸氣に乗り換へて更に遡江する事九湮にして福州に達する。途中江岸に臨んで米人出資の協和大學がある。米人が支那の到る處に文化施設を行つてゐるのは注目すべきである。

閩江の右岸倉前山側に船着がある。我が大阪商船を始め、招商局その他の碼頭が此處に列んでゐる。目下福州を中心とする海運は、上海航路には大阪商船の他に英船・支那船があり、厦門・汕頭・香港方面に英船・日清汽船が動き、獨逸船も時に茶を積みに寄港してゐる。大型戎克は勿論臺灣を始め支那沿岸各地と往來してゐる。重なる輸出品は茶の他には木材・紙等があり、輸入品は棉布・棉糸等で、主なる取引先は上海と香港である。一九三一年の貿易總額は二千三百餘萬兩で、最近では厦門・汕頭にも及ばず開港が古い割に甚だ振はない。しかし九百浬に達する閩江の河航水路は古來福州をして、流域物資の集散地となし、國內商業は繁昌してゐる。

各國領事館、居留民住宅地は倉前山西方丘陵地帯にある。昭和九年末邦人の在住するもの内地人三一三人、臺灣人一四二九人に達してゐる。外國人は他に五〇一人あり、米・英・葡・佛各國人が比較的多數である。尙福州南方十餘里の福清縣には邦人女子六四名がある。その多くは内地に渡來した支那行商人に連行されたもので悲慘なる生活を營んでゐるものが少くないとの事である。

烟臺（倭寇臺）に登れば閩江を挟んだ麗しい福州南臺の風光が一望の下に集まる。（寫眞參照）脚下は倉前山、江中の中洲を隔て、對岸に繁華な支那人街があり、遙に福州城内干山の白塔も見える。

流石福州杉の本場だけあつて木造家屋が少くなく、又白聖の壁を持つものが多く、榕樹に交つて松林等もあり、我國の風景に近似してゐる。福州總人口四十萬の中その六割は南臺に住む。

萬壽橋を渡れば潘思渠の詩さながらに魚蟹の艇の蜩集するを見る。之は蟹家とも呼ばれる水上生活者で舟を以て家となし、陸上の漢族とは婚姻を通じない。廣東のそれと同族である。陸上は陸上で、三本の大型の銀の簪をさす奇習のある所謂「三條簪依嫂」なる蠻姿が下級の勞働に服してゐる。最近警察當局の異裝禁止により漸次影をひそめつゝあるが、我が京都の大原女的存在である。尙、清は八旗の大軍を福州に駐屯してゐたので滿洲旗人の子孫も多數殘存してゐるが多くは零落してゐるとの事である。民族の優勝劣敗の跡、三思すべきものがある。

橋の北詰より乗合自動車で福州城に赴く。この沿道は福州目貫の通で數層の近代式店舗が軒を連ねてゐる。南門址より環城路を左にとり烏石山に登つて城内を大觀する。(寫眞參照) 北に西湖と並んで越王山(寫眞の中央の丘阜)があり、東に白塔寺を前に千山が見える。明代の外城はこの三山を連ねて城壁が營まれたのである。更に目をあぐれば連山四周して眞に閩中の地形である。城内には近代建築の官衙學校に和して、福州の歴史を語る寺觀堂塔の類が少くない。そこには唐碑として著聞する審知の德政碑、萬古正學の祖と仰がる、朱熹の書を始め此地出身の文人墨客の遺芳を傳へ、福州の町をして一段のさびを感じしむる。⁽²⁰⁾

人力車を雇つて南門大街を北上する。城内の中心街であるがその繁榮は遠く南臺に及ばない。羅城の周隍幅二間位のクリニックが街路に直交してゐる。虎節路を越へて舊子城區に入れば、省政府を

始め省會公安局等の官衙多く、又その中央十字街に鼓楼があり、今に至る迄支那古代都市計畫の遺構を存してゐる。鼓楼の東北に當り閩越王の宅址と傳へらる城隍廟に參る。城内は清掃され民間の信仰厚きを思はしむる。廟内には駐兵を禁ずるの立札があつた。社寺が兵隊の宿舍に充用されてゐるのは支那到る處で遭遇したが福州では先年の共產軍事件以來福建綏靖公署が漳州に南下してゐるので福州城内では兵隊の影は左程目につかない。

福州は中央と隔絶してゐる爲、人心一般に保守的で溫和である。宋と云ひ明と云ひ漢族の朝廷最後の天子が此地で即位してゐる事は興味深く、宣統廢帝を奉じて變らず遂に今日の滿洲國をなした元勳鄭孝胥氏が又この地の産なる事は色々と考へさせられる。(一九三六、一一、三二)

附記、福州見學に際して種々の便宜を供與された日本人小學校長石井喜之助氏並に東道の勞をとられた川崎登氏に深謝申上ぐる次第である。又福建省立病院の林伯輝氏とは福州から上海、上海より長崎へと行を共にし互に胸襟を開いて語り合ふ事ができたのも忘れ難い喜びである。

註

- (1) 東京地學協會 南支那地質圖 大正九年

山根新次 江西省撫河流域及福建省閩江流域の地形地質 地學雜誌

二十八年 大正五年

- (2) G. B. Cressey: China's geographic foundation. P. 334, 1934

- (3) 市村瓚次郎 唐以前の福建及臺灣に就いて 東洋學報八卷 大正八年

- (4) 徐景熹等撰 福州府志卷一卷四 乾隆一九年(一七五四年)

- (5) 楊文洵等編 中國地理新誌 一七六頁 一九三五年

- (6) 那波利貞 宋代に於ける都市の發達と庶民生活の向上 世界文化史大系
- (7) これより以下福州の發達は三山志閩都記福州府志纂福建通志による。
- (8) 王應山纂輯 閩都記卷一 明代の撰道光十一年(一八三一年)重鐫
- (9) 高岐編 福建省舶提舉司志 嘉靖三十四年(一五五五年)
- (10) 桑原隲藏 蒲壽庚の事績 昭和十年決定版
- (11) 矢野仁一 支那近代外國關係研究 二一七頁以下 昭和三年
- (12) 富田芳郎 南支那の都市の景觀地理 地理教育二三卷二三號 昭和十年
- (13) 西山榮久 支那都市とその二大種類 地理教育九卷六十卷二號 昭和二年
- (14) 西田與四郎 支那の都市 地理學評論一卷七號 大正十四年
- (15) 王益厓 無錫都市地理之研究 地理學報二卷 一九三五年
- (16) 鄧宗楷等編 福州便覽 一九三三年 警官専校主任鄧氏他二氏が市長丘兆琛の囑託を受けて編纂せるもの、記事略信ずべきものと思はれる。
- (17) 水路部編 支那海水路志 三卷 一八頁 明治三十八年
- (18) 東亞同文會 支那省別全誌 一四卷 福建省 大正九年
- (19) 外務省東亞局 滿洲國及中華民國在留本邦人及外國人人口統計表 昭和九年十二月末日現在
- (20) 久保天隨 福州の一瞥 南方土俗 一卷二號 昭和六年